

前口上

これより、かの徒然草の顰みに倣ひ、新装の、YY 版徒然草を物しよう。

YY とは、僕 Yoshio YAMAGUCHI のイニシアルであり、日本同業者〔素粒子（又は高エネルギー）・原子核・宇宙線の物理の communities〕の中で通用して居る、僕の字 (china 流ではアザナなのだが、同行衆の使ふアダナ) でもある。今後は僕と書く所を簡単の為に Y と書くことにしよう。妻、頬子も initial がワイなので、引用するとき小文字の y を使う。これは y 自身の発案になる略号であって、亭主閑白のせいではない。彼女はメモなぞに、僕を Y、自分を y と記して来たからである。

所で、Y は仕事の為に、現役の時はもとより、東大停年後も、外国へ往くことが多かった。Yy は新婚早々 USA は片田舎のイリノイ（州立）大学に 2 年弱、次いで Geneve に長短合計すると 5 年有余年を過した。その他にも 1 両日から半月乃至 2 ヶ月となると Geneve やパリ、ロンドン、ローマなどの滞在は数が多くて、パスポートのスタンプでも調べないと判らない。行った外国の数も多分 30 を越えてゐるだらう。物理屋として、外国行きの多い方ではなかったかも知れないが、決して少い方ではなかったと思ふ。だから、Y も y も思考法・行動様式は西欧の同業者並である。しかも欧米で鍛えられて頑固で、図々しくなって來た《但し断っておくが、これは Y の生来の性格ではない。対（欧米）人との付合ひ上、意識的に自己改造に努めた結果なのである。小学校一年生に入学した許りの頃は、教室で先生にあてられるのが怖くて又恥しくて手も挙げられぬ内気な子であった》。Y も y も欧米でやって來た通りに（なるだけ日本でも）振舞ふ《日本ではさうも行かない場合が屡々あって、肩が凝って仕方がなかった》。欧米の友人・知人達は、自分等と同じタイプの Yy を見て、少々付き合ひ馴れした頃に云ふ：「これまで日本人はいつもニコニコしてゐて、比較的寡黙、しかも滅多に No と云はないと思ってゐた。しかし君たち夫婦は、我々のイメージにある日本人と丸で違ふ。我々と同じように考へ、行動し、何でもスパスパと物を云ひ、はっきりと意見を言ひ、とくに反対意見も徹底的にやる。こんな日本人に初めて会った。」どうやら日本からの同業者は、物理の議論はしても、インテリの会話はさっぱりと云ふことであつたらしい…。やれやれ、日本の国内では、国際交流、文化交流と賑々しいのに…。

こんなに大見得を切ったものの、Y は二世代前の先輩、旧帝大教授、の前へ出ると、実は全くの形なしである。これ等の大先生方（全部ではあるまい）に和漢欄ことは何も無く、古今東西の古典に造詣が深く、興到れば、シェ

ークスピア作の名台詞、ラシーヌ劇のそれ、ギヨエテのファウスト、唐詩、エトセトラ、エトセトラ、を原語を詠唱し、筆を探っては押韻を違ふこと無く詩をさらさら書き下す…。こうした先輩と比べられたら、Y なんぞとんだ唐様で書く三代目に過ぎないんでござんす。唯々恥入る許りでありますよ。

しかしである。Y にも意地がある。小学校では入って、優等生、出る時は唯の生徒だったが、中・（旧制）高では入学時は凡、卒業時は（高ではクラス内だけで——実は理乙の他のクラスには、見上げるばかりの 100 点に限りなく近い秀才がごろごろ居た）（期末試験の点だけで見れば）トップクラス。《両親や学校の先生方は、僕を秀才と見てゐたらしいが、本当を云ふと Y は 100m 競走の型ではなく、本当はマラソン勝者型だった。》

小・中・高の戦前教育は、旧仮名を Y の脳に深く叩き込んだ。今でも、気をぬいて和文を書くと旧仮名になって了ふ。然らばと云ふ訳で、この YY 版つれづれ草も旧仮名で押し通して呉れよう。日本人の平均寿命は戦後急速に伸びて今や世界一であるとか。老人は停年後の長い余生を持て余すこの頃とか。古来 50 の手習ひと云ふから、停年後、もっと有効に何かを始めるのがよからう。その一つに、昔なつかしい旧仮名に戻るのも悪くあるまい。

素晴らしい歴史的仮名使を放棄したのは、戦後日本の文教政策中最大の失敗の一つと、Y は愚考する。

フランスもイギリスも旧仮名——発音と違ふ摩訶不思議なスペル——に固執してゐるではないか《だからこそ Q: GHOT, A: FISH と云ふ謎々が成立する*》！？それこそ文明国——伝統文化の保全と継承に力める——といふものである。

発音する通り書いては、フランス人にも判らないだらう。そもそも神の言葉である《ナポレオンの言葉、ついでに云ふとドイツ語はカラスのコトバとか》フランス語を守ることはアカデミー・フランセーズの重要な仕事の一つであった。ラシーヌ・モリエールの時代のうるはしきフランス語をアガデミーがいくら守らうとしても、《フランス》文化の中心、パリのフランス語の揺動は予想以上に大きく、「古拙文化は文化果つる辺境に生き残る」という社会人類学の定理の通り、今やラシーヌ式古風佛語は北米の佛植民都市に残るのみ——パリの現代っ兒は、ケベックよりの客との佛語を、モリエールのありし日の劇を聞くようだと、少々嘲ける。

更に付け加へれば、1953 年 10 月にサンフランシスコに上陸した時見た、在加日本人の為の日字新聞は、ルビ付本漢字、旧仮名、言葉づかひは明治・大正調。すっかりうれしくなつかしくなった。Y はかくも“古風”になれ親しんできたのだ。

脚注

* enough, women, station. 所で一番長い英語の単語は何かね：答
は…
smiles; s と s の間が 1 マイルもあるから。

古代ローマの輝かしい伝統をあっさり放棄した、イタリアの新仮名書きの先例に倣ふ必要は毛頭なかった。《事実はそんな事ではなくて USA の指図か？》

USA と云へば米語は英語と少々毛並みがちがふ。米語では centre は center、colour は color、neighbour→neighbor、lift は elevator、ground floor →first floor … などがあるし、Hi-way では turn rite とくる。それでも大筋では旧英語式の仮名を保持してゐる。

第一イタリアへ行くと、イタリア語に暗い Y なんぞ実は大困りである《イタリア語を習はなくて御免》。イタリア語の表示や看板を ch→q, f→ph, etc と置き換へて、ラテン語か英・佛・独でなれた語彙に戻して考へないとさっぱり判らぬ。*

話が脱線しそうだ。要は、旧仮名に固執したいと云ふことだった。

閑話休題。かうした訳で、世界各地を渡り歩き、友人・知人をつくり、多くの異文化を見聞した。かうした事共を、気の赴くまま、つれづれと、書いて往かうと云ふ次第である。

これから綴る所は、エピソードの数々・ふつと思ひ出した印象的なスポット、《主に物理学者だが他の学者達をもおり混せて》学者の、或は略歴、或は業績の一部、時折の耳に残る言行、名言、苦言、失敗談、…、將にチャンコ鍋。時には眞面な素・核・字の（あるテーマについての）物語り、…。これ等をカッター・サリット・サーラガや枕の草子、更には史記のスタイルを借用し、順不同に叙述、小話、中話、笑話、謎々を折り混ぜて書き進めよう。また旅に触れる時には東閣紀行や太平記の何とか卿の東下り（Y に擬古文は手に余るから、それ等の現代訳風）に倣ひもしようかな。

幸ひ、命長らへて、書き終へ、並び直せば、20 世紀に生をうけた一物理学者がどんな一生を歩んだか、どんな連中と付き合ったか、少しは判ってもらへよう。

これは物理学や社会学の正史でもないし、ちゃんとした伝記、旅行

記でもない。しかし普通の眞面な科学史書、社会史書に書き込まれるとも思はれない、《裏面史》の資料となるように心掛ける。いや、ご免、そんな大仰なことではない。気ままに、ありのまゝを、裏面史の欠をいささかなりとも補ふ為の私記、たゞそれだけのこと。

前口上は短しを以て上をなすとか。相すまぬことをした。しかしこれこそお喋り好きの YY の眞骨頂。おゆるしあれ。

では、始めよう。

脚注

* telefon, foto, バス停の Fermata Richiesta, 面倒なのでこれ以上の例はやめた。

ついでに云へばラテン語の語類の e をスペイン語では残し英語ではおとす。頭

例、 estation, Espana vs station, Spain
